

平成29(2017)年度 博士論文要旨

「性別越境者問題」の社会学的研究

—「性同一性障害」概念にもとづく社会問題化の超克—

宮田 りりい

1990年代半ば以降、日本では心身の性の不一致を精神疾患として捉えた医学概念である「性同一性障害」を海外から導入すると共に、医学界を中心に当該概念にもとづく社会問題化が展開されてきた。その結果、当該概念にもとづく医療・法・教育的支援の整備が進められると共に、当該概念は広く世間に浸透するようになった。一方海外では、「トランスジェンダー（性別越境者）」を病理化することに反対する立場を取る、脱病理化運動がよりいっそう注目を集めるようになってきている。だが、前述のとおり「性同一性障害」概念にもとづく社会問題化が主流となっている日本では、こうした脱病理化運動がインパクトを伴って受け入れられておらず、なかなか浸透しない状況にある。それでは、日本ではいったいなぜ当該概念にもとづく社会問題化が主流となったのだろうか。加えて、上記のような主流化のもと、「トランスジェンダー」の人たちはどのような状況に置かれているのだろうか。そこで、本論文ではこれらの問いについて明らかにすることを旨とすると共に、そこで得られた知見をもとに日本の「性別越境者問題」における課題について考察を行う（第1章）。

本論文では、分析のための中心的方法論として、社会問題化をめぐる人々の相互作用に注意を向ける構築主義アプローチを採用する。さらに、「トランスジェンダー」の中でもこれまでの「性同一性障害」概念にもとづく社会問題化から周縁化されてきた人々の声を丹念に描き出

すために、個人の経験にもとづき（社会的背景にも注意を向けながら）その経験が継時的に変化していくプロセスを捉えようとするライフヒストリーを用いて実証研究を行う。なお、本論文の調査対象者は13名の「トランスジェンダー」（内、出生時に割当てられた性別が男性の人は9名、女性の人は4名）であり、2014年10月から2017年10月の間に半構造化面接を実施した。（第2章）

第3章では、「性同一性障害」概念にもとづく医療・法的介入に対する意識変容のプロセスについて明らかにした。調査対象者たちは当初、当該介入に対して自分が望む性のあり方を体現するために必要な手段として捉え、どちらかと言えば肯定的な印象ばかりを抱いていた。だが、その後当該介入を受けようになると、次第に否定的な印象も抱くようになっていった。こうした否定的な印象の背景として、望まない性別適合手術を周囲から後押しされて困る等、当該介入では（男／女という）性別の二分化にもとづく周囲から期待された固定的な性のあり方の体現を求められることから、調査対象者たちの望みの性のあり方が抑圧されてしまう可能性があることを指摘した。

続く第4章では、教育における「性同一性障害」支援に注目し、社会の側との相互作用を通じたジェンダー／セクシュアリティに関する意識変容のプロセスについて明らかにした。調査対象者たちは、周囲から期待された固定的な性

別役割モデルの体現を求める社会の側との相互作用を通した自己形成過程の中で、ジェンダー／セクシュアリティに関する違和感や嫌悪感、抑圧的感覚を覚えるようになっていた。これに対して、教育における「性同一性障害」支援では、「トランスジェンダー」が直面する問題の源泉を「性同一性障害」という個人の内在的要因に見出すことから、上記のような社会の側との相互作用を通した自己形成過程の中でジェンダー／セクシュアリティに関する違和感や嫌悪感、抑圧的感覚が生じるという視点は含まれない。そのため、当該支援では固定的な性別役割モデルの体現を求める社会の側の問題が問い直されることなく、むしろそうした社会のあり方の維持・再生産に加担してしまう可能性があることを指摘した。

以上、第3・4章では、従来「トランスジェンダー」が直面する問題の解決に寄与するものとして考えられてきた「性同一性障害」概念にもとづく医療・法的介入や教育における支援には、当該集団の性のあり方を抑圧してしまう可能性や、固定的な性別役割モデルの体現を求める社会の側の問題を問い直さず、その維持・再生産に加担してしまう可能性があることが分かった。

続く第5章では、男性としての日常生活と女装系商業施設を拠点とするパートタイムの女装ライフという二重生活を送る人々の事例を取上げ、周囲の人々との相互作用を通して性別越境を伴う経験がどう意味づけられていくのかについて明らかにした。調査対象者たちは、成長する中で異性愛中心主義を含む周囲から期待された固定的な男性役割モデルに対して違和感や抑圧的感覚を覚えるようになり、そこからの解放を求めたことがパートタイムの女装ライフへとつながっていた。これまで、パートタイムの女装ライフを送る人々は、固定的な「性同一性障害」のイメージにうまく適合しないことから性

のあり方に関する問題に直面している存在としてみなされない傾向にあったが、上記のように当該集団の中にも性別に関する違和感や抑圧的感覚を覚える人々が存在することが明らかになった。さらに、そうした違和感や抑圧的感覚からの解放には、支配文化とは異なる独自の生活文化を持つコミュニティが寄与しているということも分かった。

続く第6章では、出生時に男性に割当てられ、さらに性暴力の問題に直面した経験を持つ調査対象者たちの事例を取上げ、性別越境と性暴力被害との関係について明らかにした。第1に、調査対象者たちは女装する男性へのスティグマが存在することや、そうしたスティグマのために安心して女装姿で過ごせる場所が限られること、さらにそのような場所では人間関係が密になりやすいことから、性的からかいを伴ういじめやDVといった性暴力被害に対して脆弱な状況に置かれていた。第2に、調査対象者たちは独自の解釈装置によって、自らの痴漢被害に対して「女性に見られた」と肯定的意味づけをしたり、他者がレイプ被害を受けたことに対して「楽しそう」と肯定的意味づけをする等、自らの被害経験や他者による被害経験の語りを相対化し、性暴力被害を被害として認識することが難しい状況にあった。第3に、HIV感染症を伴うことで他者への加害恐怖を覚えるようになった調査対象者は、そうした加害恐怖を回避する可能性をHIV陽性者のコミュニティに見出すものの、「トランスジェンダー」であることからゲイ男性が中心となっている当該コミュニティから周縁化され、そうした加害恐怖を回避する可能性を失っていた。このように、性別越境を伴うことによって、性暴力の問題がよりいっそう深刻化することが示された。

以上、第5・6章では、「性同一性障害」概念にもとづく社会問題化においてほとんど想定されてこなかった、パートタイムで女装ライフ

を送る人々が直面する問題や、「トランスジェンダー」が直面する性暴力の問題について示した。

第7章では、日本の「性別越境者問題」再考として、前述した実証研究(第3章から第6章)の知見をもとに、「性同一性障害」概念にもとづく社会問題化が主流となった背景及び、そうした主流化の中で「トランスジェンダー」の人々はどのような状況に置かれているのかについて考察を行った。まず主流化の背景については、支配文化における固定的な性のあり方をおびやかさない形で社会問題化が展開され、さらにそれを一部の当事者たちが積極的に支持したことによって、上記のような性のあり方を当然視する傾向にある世間の人々からより正当なクレームとして理解や支持を得やすかったことが考えられる。だが、そうした主流化の中で「トランスジェンダー」の人々は、「性同一性障害」概念にもとづく支援において固定的な性のあり方の体现を求められたり、固定的な「性同一性障害」のイメージにうまく適合しないことから性のあり方に関する問題に直面している存在としてみなされることがあった。さらに、「トランスジェンダー」の人々は性のあり方によって性暴力の問題がよりいっそう深刻化しやすい状況に置かれていたものの、上記の支援において当該集団が直面する性暴力の問題はほとんど想定されてこなかった。

以上の考察によって、「性同一性障害」概念にもとづく社会問題化が主流となった従来の「性別越境者問題」における課題を指摘することが出来た。そして、こうした課題は「性同一性障害」という「トランスジェンダー」の病理化を源泉とするものであることから、その解決のためには、今後脱病理化へと切り替えて行くことが求められる。そこで、以下では脱病理化へと向かうための具体的な解決方策について検討を行った。

まず、「トランスジェンダー」の人々の中にも病理化に反対／賛成する立場が存在することに注目し、両者の相違を「障害学」における2つのモデル(社会／医学モデル)を軸にして整理していった。その結果、両者は単純な対立関係にあるのではなく、どちらかと言えば錯綜状態にあり、生産的な議論を蓄積していくためには特定の概念に対する意味づけの整理や背景知識の共有が必要であることが分かった。次に、脱病理化を支持する当事者を中心とする団体が存在しないことに注目し、そのような団体活動のために何が必要なのかを整理していった。その結果、当該活動に活用出来るファンが存在することや、商業施設やサイトまたはスマートフォン・アプリ等を通して同じコミュニティ、あるいは特定のコミュニティに属していなくても当事者同士のネットワークを構築出来る可能性があることを指摘した。

それでは最後に、本論文の学術的インパクト及び実践面での貢献について論じる。まず、学術的インパクトとして、「トランスジェンダー」が直面する問題が、どちらかと言えば(男／女という)性別の二分化そのものからではなく、そこに意味づけられた固定的な性別役割モデルから生じていることを示した点にある。すなわち、「トランスジェンダー」が直面している問題は、単に当該集団に限定された特別な問題ではなく、男／女で二分化しようとする社会の中で生きるあらゆる人々に関する問題でもある。それゆえ、「トランスジェンダー」が直面する問題を捉える上でより重要となるのは、「誰の問題か」という視点ではなく、「何の問題か」という視点であると言えよう。次に、本論文における実践面での貢献としては、脱病理化に向けた生産的な議論の蓄積や脱病理化を支持する当事者中心の団体活動のための具体的な手立てを示した点にある。「トランスジェンダー」の人々は一枚岩ではなく、同じコミュニティ、あ

るいは特定のコミュニティに属していないという状況も見られる。こうした中、「トランスジェンダー」同士のネットワークを構築し、脱病

理化に向けた活動を展開していくことは、今後の「性別越境者問題」構築において重要な取組みとなるだろう。